

## 次世代を担う指導薬剤師と教員との共同体制による学生実習の新しい視点

大井一弥,<sup>\*,a</sup> 高村徳人<sup>b</sup>**A New Viewpoint of Student Training by the Cooperation System with a Directive Pharmacist and a Teacher Leading the Next Generation**Kazuya OOI<sup>\*,a</sup> and Norito TAKAMURA<sup>b</sup><sup>a</sup>Faculty of Pharmaceutical Sciences, Josai University, 1-1 Keyakidai, Sakado City 350-0295, Japan, and<sup>b</sup>Second Department of Clinical Pharmacy, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare, 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka City 882-8508, Japan

薬学6年生が一番に担うものは、薬物治療において患者の苦しみを抜いて楽を与える（抜苦与楽）ことのできる臨床能力に長けた薬剤師を養成することにある。24時間待ったなしのフルタイムで展開される患者治療の本質に薬剤師が食い込むためには、この薬剤師養成を避けては通れない。この薬剤師養成には既存の薬学の幅広い知識を丁寧に教え、学生に修得させても無駄であることを現段階においてわれわれ薬学教員は認識しなければならない（実践に通用するものは薬学的知識ではなく薬学的技術のみである）。特に、臨床未経験の大学教員（＝基礎薬学系教員）（大半の大学では9割以上を占める）は強く認識すべきである。そして、あまり自分たちの科学者の意見を主張しないで、一度くらい、患者薬物治療に立ち向かった薬剤師（＝次世代を担う指導薬剤師）たちの軌跡と実績を十分に尊重し、称賛すべきである。なぜならば、彼らは薬学的技術を一度も大学教員から学ぶことのなかった薬剤師であるにも係わらず、彼らは多忙な業務の中、臨床に耐え得る薬学的技術を独自で開発し体得したのである。しかし、このようなことを医療現場の薬剤師のみに今後も継続させてはいけない。なぜならば医学部では多数の臨床系教員（＝臨床医兼教官）が医学的技術を医学生に教えることにより診察や治療技術は進歩しているからである。したがって、薬学部も現場の

指導薬剤師の頑張りだけに頼ることは許されないのである。そのような無責任なことを薬学部が今後も続けるならば、益々薬学的実践技術は遅れを取ってしまうことになる。薬学6年生を担う基礎薬学系教員の使命は、薬学的実践技術を創り出すためのサポートを全面的に行うことである。そして、基礎薬学系教員は臨床系教員だけに薬剤師養成を任せてはいけないのである。少人数の臨床系教員だけでは薬学の研究成果を基にした高い臨床能力を有する薬剤師養成はとうてい無理なのである。また、“基礎なくして応用なし”に象徴されるように、少なくとも薬学部において臨床系教員と基礎薬学系教員は薬剤師が使い極めるべき新たな薬学的実践技術開発のために力を合わせねばならないのである。基礎薬学系教員は薬学的実践技術の開発に基礎的研究成果をどう組み込むかを真剣に考え実行に移すときがきているのである（これは次世代を担う指導薬剤師と薬学教員との共同体制が必須条件）。それと並行して薬学部が直ちに行うべき重要なことは、既に薬剤師側の技術を開発しその技術を用い薬物治療の実践において抜苦与楽の成果を上げている指導薬剤師の実践技術をすべて拾い上げ、実践臨床薬学として学問体系化し、全国の薬学部でそれらの実践技術を学生実習において教示し習得させることである。この偉業は、まさに次世代を担う指導薬剤師と教員との共同体制による学生実習の新しい視点からしか生まれてこない。研究の世界において常に競争が行われ、そこには勝者や敗者が存在してきた厳しい歴史がある。今まさに医療人の中で24時間患者のそばにいる必要のない薬剤師は敗者になろうとしている（現

<sup>a</sup>城西大学薬学部（〒350-0295 坂戸市けやき台1-1）、<sup>b</sup>九州保健福祉大学薬学部（〒882-8508 延岡市吉野町1714-1）

\*e-mail: zooi@josai.ac.jp

日本薬学会第126年会シンポジウム S26 序文

状として、薬剤管理指導業務は週1回しか施行されておらず、さらに重篤な患者に関して薬剤師の直接的な関与は皆無である)。薬剤師を輩出してきた薬学部はこの現状を打開しなければならない義務があるのである。もうそろそろ、基礎薬学系教員も、科学者養成に学生を導くことのみを夢みるのではなく、臨床能力に長けた素晴らしい薬剤師を養成することに没頭するときがきているのではなかろうか。薬学6年生による薬剤師養成は、薬学の制度をただ変えただけに留まれば何1つ変わらないのである(これまでの薬学修士卒と差はない)。この薬学6年生は全薬学教員の使命感を変える制度でなければならないのである。そのためには、次世代を担う指導薬剤師と薬学教員との共同体制は重要なこととなる。

ここで薬学部の長い歴史を振り返ってみると、薬学は薬剤師を全く経験しない純粋な科学者が薬剤師養成を行ってしまった、他の職種を養成する(大学あるいは)学部では考えられない特殊な形態であったことを、薬学6年生が開始された現時点において

薬学教員も薬剤師も認識しなければならない。その認識が欠落していたために生じた薬剤師の最大の悲劇は、医学に引けをとらないサイエンス(研究の成果)を薬学は持ちながら、医療技術において大差を付けられてしまったこの現実である。

これまでの薬剤師養成課程において学生が学んだものは知識のみに偏った“受身の薬学”であった。今こそ、全薬学教員と次世代を担う指導薬剤師との共同体制で創出される薬学的実践技術を盛り込んだ“攻めの薬学”を学生に投入する時期がきているのである。そして、近未来において、“攻めの薬学”がもたらすものは、薬剤師に対し社会が決して与えようとしなかった“名薬剤師”の称号であるとわれわれは確信する。

われわれ現場経験を有するオーガナイザー及びシンポジストは、本シンポジウムで展開された内容が薬学6年生を成功へ導く因となることを、切に願うものである。